

【間伐材のイメージアップと森が元気になる取り組みについて】

J： 馬路村の第三セクターで働いています。うちの会社は、単純にものを作って売るという感じではなくて、森林組合と同じような機能も持っています。山で木を切り、守り、育てる。そして山で働く人も育てる。そしてそれを自分たちの工場、または村内の製材も含めた部分で加工して、それを販売していく。販売をすると、例えば東京だったらこういった商品が売れる、こういった商品だったらいいのになという情報を馬路村に持って帰る。そういうものをお金と共に循環していくという形で11年間やってきて、今年で12年目です。

その中で課題ですが、僕自身もこの会社に入って、初めて林業に携わって、勉強しながらという形だったんですが、最初の頃は大阪や東京で間伐材の説明をするときに、言葉自体はうっすら知っているけれど、いまいち意味が分からないという状態でした。10年経った今、間伐材という言葉が随分と浸透したなというのが正直なところですよ。

ただ、環境保全につながるということは知られているんですが、間伐材という言葉に対しての評価がすごく低いなというのを感じました。例えば、間伐材は捨てる木だとか、再利用などと言われます。「再利用ではなくて、有効利用です」と伝えているんですけども、単純な課題でいけばそういう間伐材に対する認識をかえることが1つです。間伐材自体の評価が低いと、どうしてもそこから生まれた商品に対してもマイナスイメージがつきまってしまうのをすごく感じました。

そういうイメージを覆すために、馬路村の役場で作ったパンフレットですが、先ほど説明した木を伐採してから実際どういう作業をして、どういう風に商品ができて、それを売ってどうなっていくのかという循環がイラストになっています。県内の小学生にコースターづくりの講習をするときには、半分の時間はこのパンフレットを使って森の勉強してもらっています。

子どもだけではなく、東京や県外でこのパンフレットを使って説明をすることでやっとな間伐材のイメージがかわります。間伐材のイメージを上げていくことで、新しい商品を作ったり、販売したり、間伐材を大きな付加価値としてつなげられるものにしていきたいと思っています。

合わせて、昔は生活していくうえで、周りに木があるのが当たり前だったと思います。しかし、今現在、木そのものを味わえるものが減ってきているのではないかなと思います。もう1度、木が当り前にある生活というものを提案していきたい。それは、原点回帰というわけではなく、今の生活に合った新しい形というものを提案し、展開し、それが最終的に森が元気になっていく、また地域も元気になっていくということにつながっていけたらと思っています。

知事： 確かに、林業、森の仕事について理解をしてくれないと、間伐材の評価というのは定まらないんだろうと思いました。そういうところをしっかりと訴えていくということは

非常に大事で、私も勉強させてもらいたいと思います。

木が当たり前のライフスタイルを展開していく方向というのは、是非目指していきたいです。高知県にとっては持っているものを生かすということにまさにつながると思うので、非常に重要なことだと思います。地産地消の観点からいけば、県産の木材を使用して木造住宅を建てる場合、1戸最大で100万円以上補助金が出る助成事業もありますが、今後耐震化（への県産木材利用の場合の助成の取り組み）の話もありますので、こちらの対策を大いに加速できればということがまず第一にあります。

もっと言えば、今後特に端材になっている部分を是非燃料として生かしていきたい。県内の園芸ハウスが使っている重油代というのは、年間50億円ですね。このお金が中東に行っていますが、高知県の間伐材などを燃料源とすることができれば、経済効果として全然違ってきますので、それを是非進めたいということで、木質バイオマスボイラーの数をどんどん増やしているところです。いわゆるエネルギーの地産地消を作る。そのためにも製材工場の強化など進めていきたいと思っています。